論　説

マカートニー使節団の画像史料
――東洋文庫の画帖を中心に――

安田　震一
（ウィリアム・シャング）

はじめに

イギリス国王ジョージ三世（1738―1820、在位1760―1820）は1792―1794年にかけて貿易拡大のために中国（清国）へサー・ジョージ・マカートニー（Sir George Macartney, 1737―1806）率いる使節団を派遣した。その目的は失敗に終わったが、東アジア地域の情報収集に関しては、成功したと評価できるであろう。この使節団のもたらした情報によってイギリスは、中国を分析可能な研究対象として位置づける手段を得たと言える。このマカートニー使節団に随行し、約1,200点もの画像史料を残した画家ウィリアム・アレグザンダー（William Alexander, 1767―1816）は、それまでのヨーロッパにおける中国のイメージを一新し、新たな「中国」または「中国らしさ」の形象をヨーロッパ諸国に定着させた。しかし、アレグザンダーがこの時期描いた絵画については、彼が訪れていない地域の風景や下絵が確認されていない作品をどう描いたのか、どの画家の下絵を用いたのか、原画と完成した水彩画とはどのように異なっているのか、など様々な疑問点が未だに解明されないままに残されている。筆者自身、かつてアレグザンダーの中国関係絵画について論じた際には、これらの疑問点について十分に分析することができなかった(1)。

マカートニー使節団、とりわけアレグザンダーの画像史料を分析するに当たって、財団法人東洋文庫（以下：東洋文庫）所蔵の *Believed to be the Original Sketches illustrating Lord McCartys* [sic] *Embassy to China in the Early part of George Ⅲ Reign*（以下：画帖）、［請求番号

MS 27］と題された76枚の記録画集(2)は大きな鍵となるものである。それらを活用することによって、アレグザンダーの画像史料の下絵が特定でき、さらに彼の作品の変遷を明らかにすることができる。また、アレグザンダーの水彩画は使節団に随行した他の画家達が描いた作品をもとにした合成画であるということを論証するとともに、これまでどこの風景なのか特定できなかった場所について考証を行うことも可能である。

そこで本稿では、東洋文庫の画帖に収められている風景画、肖像画、植物画などからアレグザンダーが描いた水彩画の下絵と思われる作品数点を取り上げて分析し、さらに数枚のスケッチ画を組み合わせて合成画が作られていることを論証する。これによって18世紀末、ヨーロッパにおける中国のイメージを改変したといわれた一連の画像史料がいかに作成されたかが明らかになるであろう。なお、画帖の作品でアレグザンダーの水彩画またはスケッチ画に類似しているものに関しては、表①を参照されたい。

1　資料となる画帖について

坂野正高氏は、氏の翻訳したマカートニー『中国訪問使節日記』の図版説明の中で、この画帖の作者が「カメラマンの役割で一行に随行し沢山の絵をかいたウィリアム＝アレク[sic]ザンダーではない」ことを指摘して、以下のように述べている。

> その理由は、第一にウィリアム・アレクザンダーの有名な画集 *The Costume of China* の二帙の原画が財団法人東洋文庫に所蔵されているが（請求番号 O-3-E-69）、それと比べるとこの写生画の方は、決して下手ではないが素人の作品であり、また画風というか、筆勢が明らかに異なる。第二にアレクザンダーは北京残留組で熱河へは赴いておらず、また帰途の国内旅行では杭州で一行と別れ、ベンスン護衛隊長と同行して、舟山からヒンドスタン号で海路カントンへ先行したのだが、この写生画帖には彼が見ていない筈の浙江省・江西省・広東省の風景のスケッチが沢山入っている。この画帖の筆者が誰であるかはにわかに断

表① *Believed to be the Original Sketches illustrating Lord MaCartys* [sic] *Embassy to China in the Early part of George Ⅲ Reign*：作品の内訳

	作品タイトル	類似作品の所蔵機関または出版物
1	リオデジャネイロ（？）	
2	リオデジャネイロ（？）	
3	リオデジャネイロ港の入り口	大英図書館 WD 960, fol. 4, no. 12, Entrance of the Harbour of Rio de Janeiro, about 6 league distant
4	リオデジャネイロの風景*	大英図書館 WD 960, fol. 57, no. 163, Unidentified coast line
5	リオデジャネイロ（？）	
6	ウチワサボテンとコウチムシ（Cactus Opuntia, the Cochineal Insect of Commerce）	『ストーントンの旅行記：図版集』（以下：『図版集』）プレート＃12, The Cactus Opuntia from the Roy［al］Botan［ical］Garden at Rio de Janeiro, Dec. 11, 1792, where there is a large plantation of these trees for breeding and rearing the Cochineal Insect, Scale 1 inch to 1 feet
7	サン・パウロ島またはアムステルダム島	大英図書館 WD 960, fol. 6, no. 18, Island of Amsterdam;『図版集』プレート＃２, View of the Island of Santo Paulo, or Amsterdam, the Conical Rock near the Entrance of the Crater bearing west, distant one mile
8	マレー人のクリス	大英図書館 WD 961, fol. 44, no. 125, A Dagger used by the Malays, with and without its sheath
9	マンゴスチン	
10	植物画	
11	コーチシナの風景画（英文解読不能だが、クリスタンデクンハではないだろうか？）	大英図書館 WD 960, fol. 56, no. 161, unidentified coastline
12	風景画	
13	船曳き（陸地で船をロープで引く人）	
14	コーチシナの女性	大英図書館 WD 959, fol. 4, no. 24,

		Woman of Turon Bay, Cochin China
15	コーチシナの女性達	
16	コーチシナの老人	大英図書館 WD 959, fol. 4, no. 24 裏、タイトルなし
17	コーチシナの行政官*	『図版集』プレート＃16, A Mandarin or magistrate of Turon
18	行政官の従者*	大英図書館 WD 961, fol. 45, no. 126, A Cochin Chinese of Turon Bay;『図版集』プレート＃16
19	コーチシナの漁師	大英図書館 WD 959, fol. 5, no. 32, Boatman of Cochin China; WD 959, fol. 32, no. 3, Turon Bay, Group of figures
20	コーチシナの官吏の船	『ストーントンの旅行記：その１』、p. 341, A Cochin-Chinese boat of ten pairs of oars, belonging to the governor of the district of Turon
21	小舟を押す船曳きと官吏*	「使節団の通過を見守る中国人達」の一部、ウィリアム・アレグザンダー、水彩画、1796年ころ、大英図書館所蔵
22	体罰の様子*	大英図書館 WD 961, fol. 70A, no. 217, Chinese village scene: a man being beaten;「使節団の通過を見守る中国人達」の一部、ウィリアム・アレグザンダー、水彩画、1796年ころ、大英図書館所蔵
23	中国人達の様子*	大英図書館 WD 961, fol. 75A, no. 235, Studies of figures and houses;「使節団の通過を見守る中国人達」の一部、ウィリアム・アレグザンダー、水彩画、1796年ころ、大英図書館所蔵
24	乾隆大皇帝の肖像画（Tchien Lung Te Whang Ti, Tchien Lung, The great［sic］Emperor）	大英図書館 WD 961, fol. 56, no. 152, Portrait of Tchien Lung. The Great Emperor
25	中国人の肖像画（下絵）	大英図書館 WD 959, fol. 28, no. 158,

		Chinese figure studies
26	中国人女性（中國女孩子, Chung quo nue hai zeu, A Chinese Girl）	
27	正大光明殿（下絵）*	「正大光明殿」、アレグザンダー、水彩画、1795年、22.8cm×35.0cm、香港上海銀行所蔵；『図版集』プレート＃21
28	万里の長城の断面図（Section & Elevation of the Wan litchang or Wall of Ten thousand Li）*	大英図書館 WD 961, fol. 59B, no. 159, Section & Elevation of the Great Wall, which separates China from Tartary. From a Drawing made on the Spot by Capt. Parish of the Royal Artillery;『図版集』プレート＃23
29	万里の長城（古北口）の風景画	大英図書館 WD 961, fol. 60A, no. 160, The Great Wall of China near the Pass of Cou-pe-koo;『図版集』プレート＃24
30	万里の長城（The present state of the Wan litchang, or Great Wall, 萬里城）	
31	満洲婦人（Man Tcheou foo rgin, A Man-tcheose［sic］Lady）	
32	植物画	
33	北京の城壁（「北京の西門の一つ平則門」の下絵？）	「北京の西門の一つ平則門」、アレグザンダー、水彩画、1795年、28.2cm×44.5cm、大英博物館所蔵
34	サンチュウェーの風景画	大英図書館 WD 959, fol. 14, no. 73, Broken bridge at San-cun-wey, Aug. 16
35	中国の船	大英図書館 WD 961, fol. 39A, no. 106, On the river Un-leang
36	風景画（英文解読不能）	
37	中国船	大英図書館 WD 961, fol. 39B, no. 108, Boats and figure studies; WD 961, fol. 40A, no. 109, Boats
38	軍隊の詰め所	
39	喫煙する女性と食事中の男性	大英図書館 WD 959, fol. 11, no. 59,

		Studies of Chinese
40	大運河沿いの軍の詰め所（A military post on the Royal Canal）	
41	大運河の水門とその近辺の寺（A temple on the bank of the Canal where there is one of the watergates）	大英図書館 WD 961, fol. 28, no. 80, Pagoda & Lock in a city of Chokian called Shin san. 1793;『図版集』プレート＃35, Chinese Barges of the Embassy passing through a Sluice of the Grand Canal
42	町の北側にある寺（A temple on the North side of the city?）	
43	蘇州（Souchoo）	
44	蘇州（？）の風景画	
45	蘇州（？）近郊の橋	『ストーントンの旅行記：その２』, p. 427, Chinese Bridge
46	従者の肖像画*	大英図書館 WD 959, fol. 27, no. 143, Chinese figure studies;『中国風俗志』プレート＃37
47	金山の風景	大英図書館 WD 959, fol. 16, no. 82, The Golden Mountain on the Blue river at Yang-tsi-Kiang-hio [Yangtze];『図版集』プレート＃39
48	船曳き	大英図書館 WD 959, fol. 43, no. 40, Trackers of the Vessels; WD 961, fol. 64A, no. 173, Tracking the Vessels
49	植物画	
50	植物画	
51	蘇州の近郊（near Soutchoo-foo）	
52	清国の兵士	
53	風景画	
54	風景画	
55	雷峰塔（Lui fung ta or Tower of Thundering Winds）*	大英図書館 WD 961, fol. 18, no. 51, Lui fung ta or Tower of Thundering Winds. On back: note by J. Barrow, Comptroller of the Household to Lord Macartney

56 杭州の南に位置する銭塘江の船着き場	パリッシュの水彩画に類似、風景及び小舟の数まで一致する。サザビーズ・カタログ1976年、ロンドン、pp. 34-35, A Place of Embarkation on the Chieng Tan Chien-Ho on the South side of Hancheu-Foo	
57 杭州の風景		
58 杭州の風景* (「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」の下絵)	「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」、アレグザンダー、水彩画、1795年、29.2cm×44.5cm、メードストン美術博物館所蔵；『図版集』プレート＃41	
59 植物画		
60 植物画		
61 揚子江の風景 (Yang tsung Kiang)		
62 銭塘江の風景 (Tcheng-tang-tchiang)	『図版集』プレート＃9	
63 洞庭湖 (Tung-ting-ho)		
64 風景画 (entering Hokieu?)		
65 風景画		
66 風景画 (Ing-tai on the Kan Kiang？) 贛江の営台		
67 風景画 (英文解読不能)		
68 風景画		
69 風景画		
70 風景画		
71 風景画	WD 959, fol. 9, no. 51, The Five Horses' Heads-Province of Fokien	
72 広東省の観音巖	WD 959, fol. 9, no. 50, The Rock quang yen [Kuan-yin]; in a cavity near the water's edge is a temple of the Bonzes;『図版集』プレート＃43	
73 広東省の観音巖	WD 961, fol. 21B verso, no. 68, Temple of the Bonzes	
74 風景画		
75 虎門の砲台 (下絵)	「虎門の砲台」アレグザンダー、水	

76　金山の風景	彩画、1796年、25.4cm×39.8cm、香港藝術館所蔵 AH91.4「揚子江の島にある金山」、アレグザンダー、水彩画、28.0cm×43.2cm、香港上海銀行所蔵；『図版集』プレート＃39

大英図書館（旧インド省コレクション）所蔵の作品名（WD）は原画に書かれている、または Mildred Archer の目録にあるタイトルを記している。画家名が記されていない場合はウィリアム・アレグザンダーの作品である。東洋文庫の画帖の作品名は筆者による。また、解読可能な英文タイトルは括弧内に明記した。＊本文で紹介した作品。

定できないが、測量・製図の専門家で、スケッチも上手であったらしい砲兵中尉パリッシュ Henry William Parish ではないかと思われる(3)。

この画帖の画家はパリッシュであると推察されているが、本画帖には異なった画法で描かれた作品が含まれていることから全て同一の画家によるものなのかは定かではない。そのため、パリッシュによって描かれたとは必ずしも断定できないであろう。

マカートニー使節団には、トーマス・ヒッキー（Thomas Hicky, 1741—1824）及びウィリアム・アレグザンダーの二人の画家が随行したが、アレグザンダーの *Journal of a Voyage to Pekin in China on board the Hindostan* [sic] *E.I.M. which accompanied Lord Macartney on his Embassy to the Emperor*（以下：アレグザンダーの『日記』）にはヒッキーが画家として、そして彼自身は、製図師（Draughtsman）(4)として記載されている。この二名の他、いささかの絵心を持っていた書記官のサー・ジョージ・レナード・ストーントン（Sir George Leonard Staunton, 1737—1801）、会計係のサー・ジョン・バロー（Sir John Barrow, 1764—1848）、そしてイギリス陸軍砲兵隊中尉ヘンリー・ウィリアム・パリッシュ（？—1798）などのアマチュア画家らも使節団に随行していた。したがって、東洋文庫の画帖は彼らのなかの何れかの人物の作品集であると考えられる。

以下、画帖のなかから、アレグザンダーの水彩画と関連する肖像

画、風景画などの作品を取り上げ、順次分析をおこなってみたい。

2　画帖の肖像画

アレグザンダーの肖像画を分析するために必要な作品が数点東洋文庫の画帖に収められている。その中でも画帖の「コーチシナの行政官」プレート♯17（図１）及び「行政官の従者」プレート♯18（図２）は特に注目すべき作品であろう。これらは、1793年５月26日から同年６月16日の間、対清使節団がツーロン湾（今日のベトナムのダナン）に立ち寄った際に出会った行政官及び従者の肖像画である。アレグザンダーは、この二点と同一の水彩画(5)を描いているが、それらをもとに版画化された作品「コーチシナの行政官及び従者」がストーントンの著書 *An Authentic Account of an Embassy from the King of Great Britain to the Emperor of China*（London, J. Nicol, 1797）（『ストーントンの旅行記：図版集』、以下：『図版集』）のプレート♯16（図３）である。水彩画では、行政官と従者は別個の画用紙に描かれているが、『図版集』では二人が一枚の版画に収められている。水彩画と版画を比べて見ると、行政官が椅子に座っている姿勢、従者の立っている角度、服装の他、煙草入れ、扇子、パイプなどの持ち物も全てが一致している。

画像で異なるのは、行政官の表情及び左手だけである。しかし、この僅か二か所の違いから、版画の意図が汲み取れるであろう。まず、下絵では顔の表情は自然で温厚に見え、目からは鋭さが読みとれない。それに対して版画の場合、左手は拳に変化し、行政官の威厳が感じとれ、眼光も鋭く、険しく描かれている。これは、当時のヨーロッパにおける「行政官」に対する概念にもとづいて版画師が手を加えたのであろう。また、下絵から版画が作成される際、画家、版画師、出版元などそれぞれの思惑によって、もとの様子を脚色したとも考えられる。

ここで、アレグザンダーの『日記』を分析すると、行政官及び彼の従者を実際に写生した場所は、ヒンドスタン号のアレグザンダーの船室であったことがわかる。アレグザンダーの『日記』には、

（左）図１「コーチシナの行政官」東洋文庫の画帖　プレート＃17　（右）図２「行政官の従者」東洋文庫の画帖　プレート＃18

図３「コーチシナの行政官及び従者」『図版集』プレート＃16

今朝、我々の船を訪問するために官吏と彼の従者が大勢乗船してきた。私の船室に官吏と従者の一人がきて、少しの間滞在した。その間、私は彼のスケッチを描き大いに気に入ってくれたようだった。しかし、それを持ち帰りたいという申し出を断り、肖像画のコピーかそのほかのスケッチをお持ちくださいと言っても聞き入れてもらえず、船室を出て行ってしまった(6)

と記されている。

しかし、『図版集』に見る背景は野外になっていることから、実際には他の画家のスケッチ画をもとにしてアレグザンダーが描いた可能性もある。この「コーチシナの行政官及び従者」は、版画家のコードウェルがアレグザンダーから原画を提供してもらったのか、または、その他のスケッチにもとづいて彫ったのかは定かではない。しかし、その作風は、アレグザンダーの原画とはかなり隔たりがある。

さらに、もう一組の肖像画を比較してみよう。アレグザンダーの有名な『中国風俗志』(*The Costume of China*)の「官吏と彼の従者」プレート♯37(図4)の下絵として用いられたと思われるのが東洋文庫の画帖の「従者の肖像画」プレート♯46(図5)である。アレグザンダーは、単独にスケッチされた作品を組み合わせて、一枚にまとめたと考えられる。画帖にある作品に見られる従者の像は、姿勢、持ち物、足の位置に至るまで「官吏と彼の従者」と同じであるが、「官吏と彼の従者」では、官吏の肖像を加え、背景を変えている。こうした一連の肖像画を見る限り、画帖にある作品の画家はパリッシュなのか、その他の画家なのかは特定できないが、画法及び構図から言ってアレグザンダーではないことは明らかである。

3　画帖の風景画

マカートニー使節団の画像史料と言えば中国の風景画が最も知られているであろう。これは、それまで貿易を拡大させるために必要な信憑性の高い画像史料が乏しかったからであろう。そのため北京、天津、杭州、蘇州、大運河沿いの都市や町、人々の交流の様子を描

図４　「官吏と彼の従者」『中国風俗志』プレート＃37、ウィリアム・アレグザンダー、アクアチント版画、1805年

図５　「従者の肖像画」東洋文庫の画帖　プレート＃46

いた風景画はとりわけ当時の記録として今でも高く評価されている。

東洋文庫の画帖に収められている作品の多くは、現存するアレグザンダーの傑作または使節団に関する出版物に掲載される風景画などのモチーフと一致する。ただし、画帖の作品を大英図書館旧インド省コレクション、香港上海銀行、その他の機関などに所蔵されているアレグザンダーの作品と比較検証すると、それらの画法及び構図、さらには色使いに至るまで異なっていることが理解できる。また、アレグザンダーの作品は他の随行員のスケッチ画を模写したり、合成したりしたものであることも判明する。以下、具体的な例に即して見てみたい。

3―1　使節団と万里の長城

万里の長城の画像史料はヘンリー・ウィリアム・パリッシュによって描かれた。当時、それらはロマンチックな光景であり、その情景は西洋人を魅了したことであろう。パリッシュの作品をもとにアレグザンダーは水彩画(7)を仕上げ、そのイメージがヨーロッパで一般的になったが、それまで、万里の長城は想像または空想の世界であった。

万里の長城及び熱河まで同行できなかったアレグザンダーは『日記』に、

> 途方もない人力を費やした万里の長城までわずか50マイル（80キロ）の地点にいながら、孫にまで誇れる機会を逸するとは……一生後悔することであろう。使節団訪問の中で最も興味深い旅程であるにもかかわらず画家が北京に残されるとは、理解できない(8)

と記している。そのため万里の長城の全体的なパノラマ、断面図や城壁を描いた作品には「パリッシュの原画による」(9)と記されている。東洋文庫の画帖にも万里の長城の風景画（プレート＃29）、さらにその断面図（プレート＃28）（図６）などが含まれている。その断面図を『図版集』のプレート＃23（図７）と比較すると、Figs. １，２，10と一致することが分かる。

さらに画帖にある長城の測量記録は、アレグザンダーの『日記』にも同一の内容で収められている。それらの筆跡は、明らかに異なっている。また、画帖にある測量記録の筆跡をパリッシュのスケッチ画及び水彩画に見られるサイン、または若干残されているメモ書きと比較すると、一致しないことが分かった。このことから、画帖に収められている全ての作品の画家がパリッシュであるわけではないと推測できるであろう。

熱河近辺については、マカートニーの『日記』には少なくとも4回にわたりスケッチを描くように、または報告に付記するように指示したと記している(10)。むろんそうしたスケッチは、アレグザンダーではなくパリッシュあるいはその他のアマチュア画家が担当していたのであろう。

中国の記録画を多く手掛けたアレグザンダーが、いかなる理由で、イギリス人画家が訪れたことのない地域への訪問メンバーから外され続けたのかは疑問である。これは、王立協会の会長を務めたサー・ジョセフ・バンクス（Sir Joseph Banks, 1743―1820）が強調した「鮮明かつ詳細な画法によって描かれた作品」(11)ということに対するマカートニーとアレグザンダーとの解釈の違いによるのではなかろうか。マカートニーは『日記』に、「［パリッシュ］中尉はエンジニア［工兵］ならびに製図師として定評のある技能を有する人であるから、これらの資料はきわめて価値が高く、かつこの問題についてこれまでに書かれたいかなる記述にも代わるものとみられるべきものである」(12)と記している。マカートニーは、パリッシュが製図師として専門的に描いた作品の方が、散漫で抽象的な作品と比較して、正確さ、鮮明さの点から記録として適切であると考えたのであろう。

アレグザンダーを除いて最も絵心があったパリッシュは、使節団がイギリスに帰国し、つぎの任務に着任する際、航海中に海に投げ出され水死してしまった。それ以降、彼の作品は全く世に出ることはなく、アレグザンダーに下絵を提供した陸軍の製図師として知られるようになった。

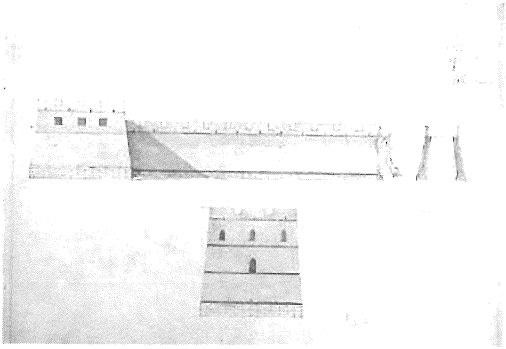


図6　「万里の長城の断面図」東洋文庫の画帖 プレート＃28

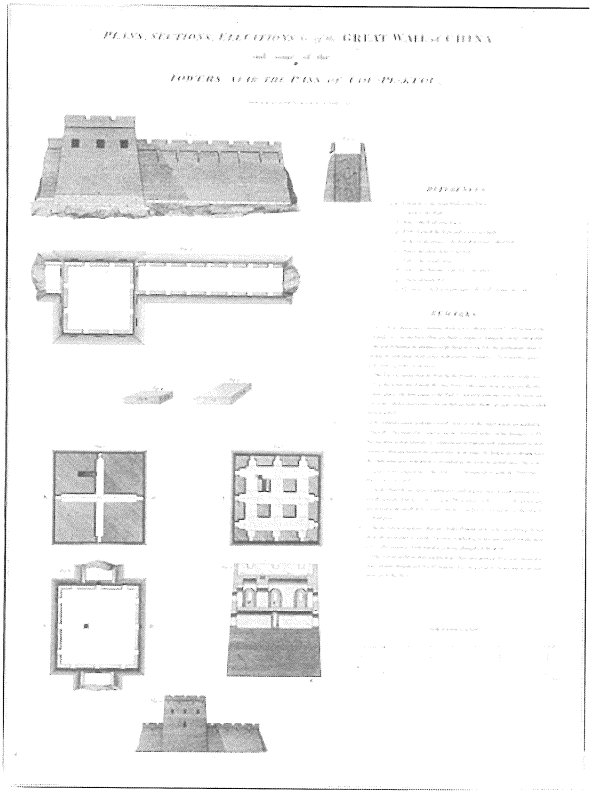


図7　「万里の長城の断面図」『図版集』プレート＃23

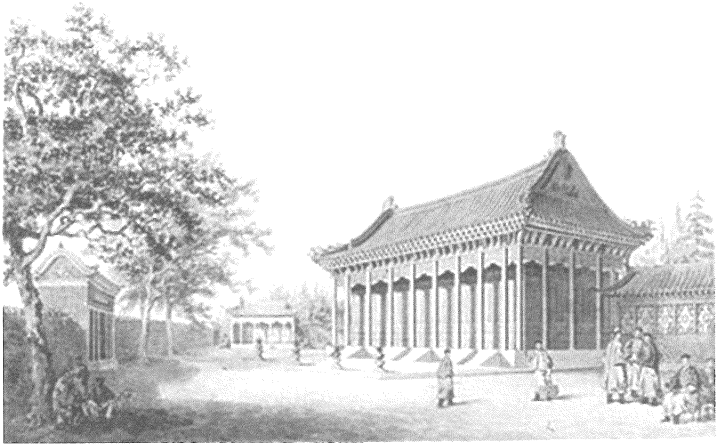


図８　「正大光明殿」、ウィリアム・アレグザンダー、水彩画、1795年、22.8cm×35.0cm、香港上海銀行所蔵

３―２　北京の風景画について

アレグザンダーの有名な水彩画「正大光明殿」（図８）は非常に貴重な記録だと評価されている。円明園の正大光明殿は1860年、英仏連合軍による焼き討ちにより焼失したため、この作品は当時の絵画、それも西洋人画家によって描かれた絵画として、正大光明殿の姿を記録にとどめている唯一の作品である。しかし「正大光明殿」は、原画が確認されていない風景画の一つである。アレグザンダーの『日記』を読む限り、彼は円明園を数回訪れ、正大光明殿に出入りしたことが記されている。というのもマカートニー使節団が乾隆帝に贈った献上品は、一時この建物に保管され、その目録をアレグザンダーが作成したからである。アレグザンダーの『日記』には、「円明園に行き、プラネタリウム［天文台］の建物をスケッチした」(13)と記されているが、正大光明殿を描いたとは書かれていない。そのため「正大光明殿」も他の使節団随行員が描いたスケッチにもとづいて描かれた可能性が高い。

そこで、東洋文庫の画帖のプレート＃27（図９）の正大光明殿の下絵とも考えられるスケッチ画に着目するべきであろう。描かれて

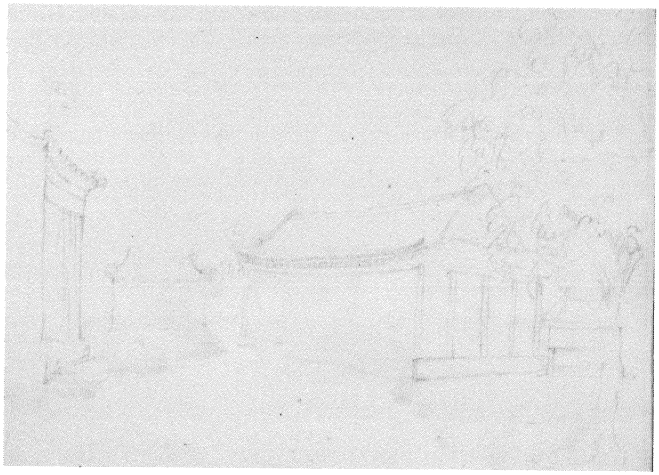


図９　「正大光明殿（下絵）」東洋文庫の画帖 プレート＃27

いる角度や建物にある柱の本数などはアレグザンダーの作品と一致する。建物の寸法は大雑把に描かれているが、この下絵らしきスケッチ画からアレグザンダーの作品の構図が判明すると考えられる。

３―３　中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔

使節団一行が杭州に到着する三日前の1793年11月７日、アレグザンダーは中国内陸部を経由して帰途につく一行から外れ、舟山列島に停泊中のヒンドスタン号に合流して海路で広東へ向かい、本隊を待つようにとマカートニーに命じられた。それ以降の画像史料は、別の画家から下絵を提供されアレグザンダーが描き直したと考えられる。

そこで「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」（図10）と題した水彩画について述べることにする。この水彩画は版画化され『図版集』にプレート＃41として収められている。この水彩画に関して1976年のサザビーズ・オークション・カタログは、「アレグザンダーの作品として知られる『中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔』は、実際にはパリッシュの原画に依拠している」(14)と記している。しか

図10 「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」、原画はウィリアム・アレグザンダー、水彩画、1795年、29.2cm×44.5cm、この図版は『図版集』プレート♯41より、個人コレクター所蔵

し、この作品はむしろ使節団に随行したアマチュア画家達のスケッチ画数点を組み合わせて、最終的にアレグザンダーが描き直した作品ではないだろうかと考えられる。実際に西湖の湖畔で現地観察を行ったのは、バロー及びパリッシュであり、アレグザンダーは『日記』で西湖には全く触れていないため、おそらく訪れる機会はなかったと推測できる。レゴウは、パリッシュ筆の「西湖と雷峰塔」(15)について述べており、そのパリッシュの画像を下絵としてアレグザンダーが用いた可能性も否定できない。

大英図書館は、西湖の景観を描いたアレグザンダーの水彩画を二点所蔵している。一点は、西湖の湖畔から見る塔や雷峰塔を含めた風景であり、もう一点は雷峰塔を単独に描いた作品である。その雷峰塔のスケッチ画の裏には、塔に関するバローのメモをそのまま書き込み、注記に「[原画は] ジョン・バローによる」(16)と記されている。そのバローのメモ書きには「この古代の建造物は、浙江省の杭州にある西湖の丘から湖に突き出るように建てられている。それは孔子の時代よりも古いとされていることから今から2600年前ということになる。有名な万里の長城に匹敵する。これは見事に石から

作られ、私が想像するに高さは200フィートである」[17]と書かれている。

東洋文庫所蔵の画帖にも西湖に関連する作品が二点収められている。その一点、プレート＃55「雷峰塔」（図11）は、大英図書館の「雷峰塔」と同一であり、そこにあるメモ書きも一致している。もう一点は、これまで筆者前著では、特定できなかった画帖のプレート＃58（図12）であり、そこに見られる山、右側の丘及び遠くにある塔に上述した雷峰塔を描き込むと、全体的にアレグザンダーの「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」の下絵として提供された作品ではないかと思われるほど、構図及び画風が似ている。若干異なる箇所は、作品前面（左側）の墓地が描かれていないことであろう。さらに「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」の右下に意味不明の文字が小さく書き込まれているが、アレグザンダーが記録用に描いた大英図書館所蔵の水彩画「杭州の西湖」には、こうした文字は書かれていない。しかし、その文字（左側に「烈多倫重」、右側に「風可書烈」ママ）が書かれているスケッチ画「マカオの墓地」[18]を大英図書館で確認できた。したがって、「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」は少なくとも三枚の下絵を合成して完成させた作品であると断定できるであろう。18―19世紀の記録画は、共同作業に頼っていたのであり、この作品のように巧みに合成することは珍しいことではなかったといえよう。

3―4　リオデジャネイロの風景画

東洋文庫の画帖にあるプレート＃1から＃5は、マカオの風景だと長年誤認されていたアレグザンダーの水彩画に描かれている場所を特定する作品群となった。この五枚のうちプレート＃3はリオデジャネイロ港の入り口を描いたものであることが、大英図書館に所蔵されている同一のスケッチ画から判明した。その他四枚の作品は、湾内の風景を広角に描いたものであると考えられる。そして画帖のプレート＃4「リオデジャネイロの風景」（図13）は長年マカオの風景だと考えられてきた作品の下絵であろう。

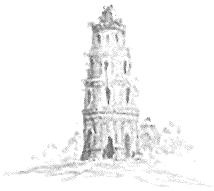


図11 「雷峰塔」東洋文庫の画帖 プレート＃55

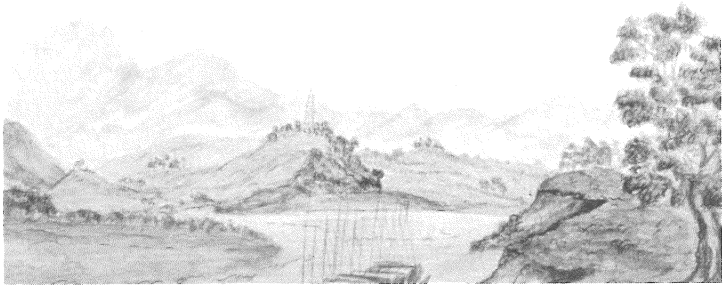


図12 「中国人墓地から見る西湖湖畔の雷峰塔」の下絵　東洋文庫の画帖
プレート＃58

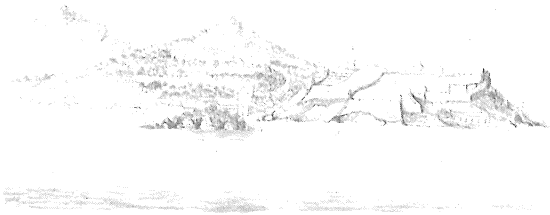


図13 「リオデジャネイロの風景」東洋文庫の画帖 プレート＃4

誤認されたアレグザンダーの水彩画「マカオの風景」（図14）は、現在大英図書館によって所蔵されている。その水彩画は大英図書館旧インド省コレクションの目録（Mildred Archer, *British Drawings in the India Office Library Artists, vols. I & II*, London, Her Majesty's Stationary Office, 1969）では「未確認の海岸線」(19)と記載されている。この水彩画がマカオの風景画であると思われるようになったきっかけは、1946年に出版されたモリース・コリス（Murice Collis）の *Foreign Mud*（London, Faber and Faber Ltd）の32—33ページに挿し絵として掲載されたことであるが、それがロンドンの有名な画商スピンクス社によって提供されていることから、この水彩画の由来は疑われることがなかったと言えよう。その後1990年にアラン・プレフィート（Alain Peyrefitte）の著書 *Images de L'Empire immobile*（Paris, Fayard, 1990）に「海から見たマカオ」と題して掲載されている。最近になってもマカオ政府発行の *Viagem por Macau, Commetarios, Descricoes e Relatos de Autores Estrangeiros*（vol. 1, Governo de Macau, Livros Do Oriente, 1997）で同水彩画は表紙を飾り、「海から見たマカオ？」と疑問符を付けながらも折り込みとしても用いられている。

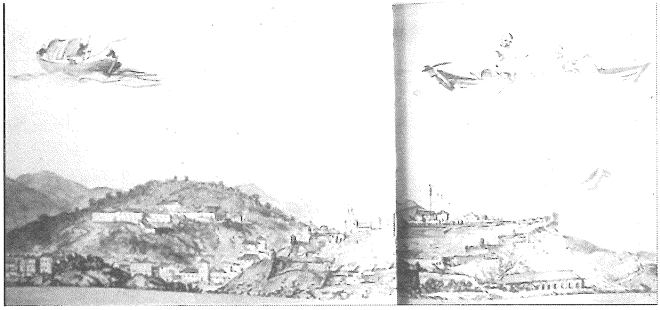


図14　「マカオの風景」または「海から見たマカオ？」、ウィリアム・アレグザンダー、水彩画、1796年、19.0cm×54.2cm、大英図書館旧インド省コレクション所蔵
Alain Peyrefitte, *Images de L'Empire immobile*, pp. 216-217より転載

東洋文庫の画帖にある作品とアレグザンダーの水彩画とを比較検証すると、構図及び描かれている角度など全ての点で一致し、同一の光景であることは疑う余地もない。次に描かれているイメージを実際にマカオの風景と比較すると、後方の山々の峰が高すぎ、その峰の数も現実とは一致しない。そして、1793—4年当時の建築物は、二階建てであったのに対して、アレグザンダーの水彩画及び画帖の作品にある建築物は三階または四階建てとして描かれている。また、小高い丘の上にはペンハー教会（Penha Church）と思われる建物が描かれているが、その尖塔の数が明らかに異なっている。

次に他のリオデジャネイロの画像史料と比較検証すると、イギリス人出版者ジョン・タラス（John Tallis, 活動期間1836—51）が出版した *Antique Maps of Countries of the World*（London & New York, The London Printing and Publishing Company, 1849—53）のなかで、同一の風景画が「ブラジルの地図」の右下にイラストとして掲載されている。さらにもう二点、クックの第一次太平洋学術調査団に随行したアレグザンダー・ビューカンが描いたリオデジャネイロの風景画と比較しても、非常に似ている角度及び景観が見られる[20]。最後に *Voyage around the World on the Corvette La Favorite, 1830, 1831, 1832, Under the Command of Captain Laplace* で紹介されているリオデジャネイ

ロの風景[21]と比較検証を試みれば、画帖に収められている作品は、リオデジャネイロの風景に間違いないと思える。

また、この作品に描かれているのがマカオのペンハー教会であると想定した場合、いくつかの矛盾が存在する。すなわち、作品下部に媽閣廟が描かれていないこと、及び、南からマカオを望んだ場合、当時の貿易船は半島の西側（作品上部にあたる）に停泊していたはずだが、画帖の作品に描かれている停泊地は（作品の右側）東側に位置していること、などである[22]。

3―5　大運河の光景

最後に、アレグザンダーの作品がいくつかのスケッチ画の合成であることを立証したのが大運河沿いの都市や町を描いた作品である。その中で非常に有名な「使節団の通過を見守る中国人達」（図15）は多くの文献にイラストとして用いられてきた。これまでその下絵は、一枚ないし二枚のスケッチ画から構成されていると思われていたが、東洋文庫の画帖を考察すると「小舟を押す船曳きと官吏」プレート＃21（図16）、「中国人達の様子」プレート＃23（図17）及び「体罰の様子」プレート＃22（図18）から合成されていることが分かった。この三枚のスケッチ画のうち、二枚は大英図書館にも所蔵されているが、残りの一枚すなわち画帖の「小舟を押す船曳きと官吏」プレート＃21に関しては、これまで原画の存在が確認できなかった。

画帖の作品によって、アレグザンダーは自らの下絵を合成して作品を描いただけではないことが確認できたと言えよう。この「使節団の通過を見守る中国人達」のように他者のスケッチ画をも引用して、巧みに組み合わせたことが理解できるであろう。アレグザンダーの作品がヨーロッパにおける中国らしさのイメージを一変したことは確かであるとしても、それをアレグザンダー一人の働きに帰するべきではない。この時代の画像史料に関しては原画または下絵、それも画家自身及び他者の作品までをも比較検証する必要があるといえるであろう。

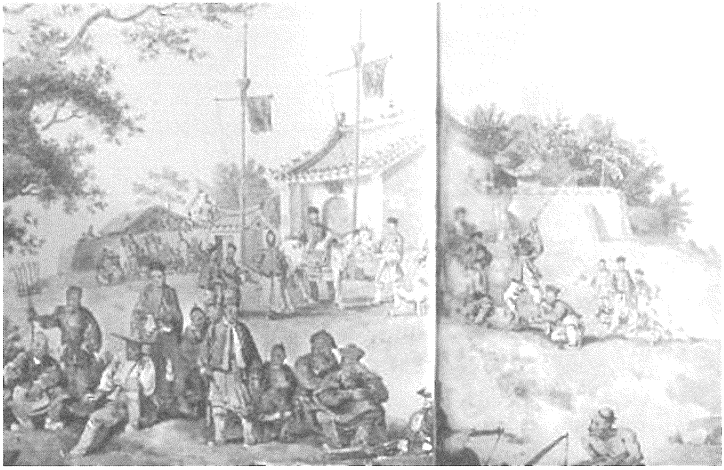
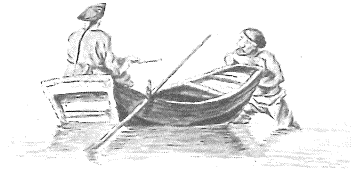
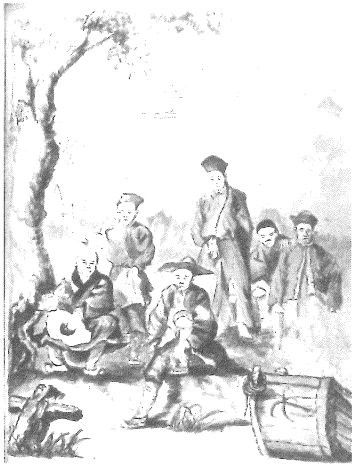


図15　「使節団の通過を見守る中国人達」、ウィリアム・アレグザンダー、水彩画、1796年ころ、16cm×24.5cm、大英図書館旧インド省コレクション所蔵
Alain Peyrefitte, *Images de L'Empire immobile*, pp. 192-193より転載



（左）図16　「小舟を押す船曳きと官吏」「使節団の通過を見守る中国人達」の中央下部
東洋文庫の画帖　プレート＃21



（右）図17　「中国人達の様子」「使節団の通過を見守る中国人達」の左下部
東洋文庫の画帖　プレート＃23

図18 「体罰の様子」「使節団の通過を見守る中国人達」の中央から右側
東洋文庫の画帖　プレート＃22

4　パリッシュ及びバローの比較検証

さて、東洋文庫の画帖に収録されたスケッチ画の作者がアレグザンダーでないことは確実だとすると、それではその作者は誰なのであろうか。本稿の最後に若干の考察を行ってみたい。

東洋文庫の画帖にある「サン・パウロ島またはアムステルダム島」（プレート＃7）は『図版集』のプレート＃2、*View of the Island of Santo Paulo, or Amsterdam, the Conical Rock near the Entrance of the Crater bearing west, distant one mile* と同一のモチーフであり、その版画の下部に、原画を描いたのはジョン・バローであると記されている。この「サン・パウロ島またはアムステルダム島」及び「リオデジャネイロ港の入り口」（プレート＃3）を考察すると、その画筆は一致し、同一の画家、すなわちバローの作品であることは間違いないであろう。

次に画帖の「ウチワサボテンとコウチムシ」（プレート＃6）及び『図版集』のプレート＃2を比較検証すると、その画風も一致する。したがって、東洋文庫の画帖に収められている作品群は、パリッシュ

によるものだけではないと思われるが、上述したごく僅かな作品のみをもとに全てがバローの作品であるとは断定することもできない。と言うのも、画帖のプレート＃56「杭州の南に位置する銭塘江の船着き場」は、1976年のサザビーズ・オークション（ロンドン）に出品されたパリッシュのスケッチ画と一致するからである。しかし、サザビーズに出品されたスケッチ画の作風及び全体的なバランス、さらに前面下部にあるサインは他のパリッシュの作品に見られるものとは若干異なり、むしろ誤認ではないかと思われる。オークション・カタログにおける誤認は珍しいことではなく、中にはパリッシュの作品をアレグザンダー作と解説したものまで過去にあった。これはオークション主催者側による誤認なのか、これまでの持ち主によってサインが加筆され、その後に至っているのか定かではないが、こうしたことはマカートニー使節団の画像史料には良くあることである。

画帖の作品を描いた画家はパリッシュであるとも言えるが、中にはバローではないかと思われる画風のものもあることを確認できた。使節団や調査団の画像史料は例外であるが、本来、画家は自分の作品を提供したり、互いに写生帳を交換することはないことから、両者が描いた個々の作品を収集して画帖に収めた可能性も否定できない。もう一つは、画帖の作品の数点に僅かなメモ書きが確認できるが、その中でも地名の綴りは、バローの著書 *Travels in China*（London, Cadell & Davis, 1804）に見られるものに似ている。無論、バローの著書においては校正者が手直ししていることを考えれば、地名の綴りの異同については随行員が出版した著書の原文を確認しなくてはならないであろう。最後に、これまで確認できたパリッシュの作品は、全てサインされていたが、画帖の作品は署名されていない。こうしたことから本画帖に収録されたスケッチ画のすべてがパリッシュの作品であると断定することはできないと考えられる。

ま　と　め

東洋文庫の画帖は、ヨーロッパにおける中国らしさのイメージを一変したアレグザンダーの作品群を取り巻く様々な疑問点を全て解明したわけではないが、この研究に対する貢献度は計り知れない。また、画帖の表題に *Believed to be the Original Sketches illustrating Lord McCartys* [sic] *Embassy to China in the Early part of George Ⅲ Reign* とあるように、この画帖は明らかにマカートニー使節団に関連するものであると断定できる。本画帖は、今後アレグザンダーまたはマカートニー使節団の研究に新たな画像史料を提供するものであるが、それにとどまらず、中国を題材とした絵画の歴史を研究する上でも大きな意義を持つ。これまでアレグザンダーは合成画を描いたと言われていたが、本画帖の分析によって、彼の中国関係絵画が自身の下絵または他の随行員のスケッチ画をもとに構成されていることが立証された。このことは、中国をモチーフにした画像史料の解釈や、その変遷の研究に、大きな影響を及ぼすことは明らかである。今後、東洋文庫の画帖のより詳細な研究によって、この方面の研究が大いに進展することが期待される。

註

（1）　ウィリアム・シャング（安田震一）『絵画に見る近代中国―西洋からの視線』大修館書店、2001年（以下、「筆者前著」と称する）、第2章。なお、本稿の記述のなかには、筆者前著と重なる部分も若干あることをお断りしておきたい。

（2）　画帖に収められている作品の内訳は、風景画51点、肖像画14点、植物画8点、船の作品3点など計76点である。これらは全て28.6cm×22.4cmの画用紙に描かれている。地域別に区分すると、ブラジルのリオデジャネイロ、アムステルダム島、ツーロン（現在のベトナムのダナン）、北京及びその近郊、万里の長城、大運河沿いの都市や町、浙江省、江西省や広東省などである。

（3）　マカートニー、坂野正高訳注『中国訪問使節日記』東洋文庫277、東

京、平凡社、1975年、pp. 343-344（以下：マカートニーの『日記』）。アレグザンダーに関しては同書 p. 239及び p. 318を参照されたい。

（4） William Alexander, *Journal of a Voyage to Pekin in China on board the Hindostan EIM which accompanied Lord Macartney on his Embassy to the Emperor*, 大英博物館 MS 35174, 1794, Hindustan［sic］Roster（ヒンドスタン号の名簿）。

（5） 二点の水彩画は現在メイドストーン博物美術館によって保存されている。スーザン・レゴウ（Susan Legouix）は著書 *Image of China: William Alexander*, London, Jupiter Books, 1980, pp. 31 & 32、さらに、*William Alexander: An English Artist in Imperial China*, Brighton, Brighton Borough Council, 1981, pp. 22 & 23では、これらはアレグザンダー筆ではない可能性を示唆している。筆者はこの二点はアレグザンダーの作品であり、その下絵が画帖の二点であると推測している。

（6） アレグザンダーの『日記』、1793年 6 月 3 日の記述。

（7） 大英図書館旧インド省コレクション所蔵 WD 961, fol. 60A, no. 160, *The Great Wall of China near the Pass of Cou-pe-koo*, 26.7cm×43.9cm.

（8） アレグザンダーの『日記』、1793年 9 月 2 日の記述。

（9） 大英図書館旧インド省コレクション所蔵 WD 961, fol. 59B, no. 158; WD 961, fol. 59B, no. 159.

（10） マカートニーの『日記』では1793年 9 月14日に 2 回、同年月17日にさらに 2 回程作品を描いたことが記載されている。

（11） Bernard Smith, “European Vision and the South Pacific”, *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, vol. 13, 1950, reprint 1970, pp. 67-68.

（12） J. L. Cranmer-byng, *An Embassy to China: Being the journal kept by Lord Macartney during his embassy to the Emperor Ch'ien-lung*, London, Longmans, 1962, p. 112の注。前掲書、坂野正高、pp. 237-238.

（13） アレグザンダーの『日記』、1793年 8 月23日の記述。

（14） Sotheby Parke Bernet, *Catalogue of Watercolours by William Alexander, Sir John Barrow, Bt., and Captain Henry William Parish, R. A. Illustrating The Earl of Macartney's Embassy to China, 1792-1794*, London, 1976, p. 36.

（15） 前掲書、Legouix, *William Alexander: An English Artist in Imperial China*,

p. 61.

(16) 大英図書館旧インド省コレクション所蔵 WD 961, fol. 18, no. 51, *Lui fung ta or Tower of Thundering Winds* 裏、19.9cm×17.1cm.

(17) 東洋文庫の画帖プレート＃55。註（16）にある作品と同一の画像及び文章である。

(18) 大英図書館旧インド省コレクション所蔵 WD 961, fol. 13, no. 37, *Chinese Monuments at Macao*, 10.2cm×19.9cm.

(19) 大英図書館旧インド省コレクション所蔵 WD 960, fol. 57, no. 163, *Unidentified coast line*, 19cm×54.2cm.

(20) Bernard Smith, *Imagining the Pacific, In the Wake of the Cook Voyages*, New Haven and London, Yale University Press, 1992, p. 55のプレート＃46を参照されたい。

(21) Barbara Earman (ed.): *Voyage around the World on the Corvette La Favorite, 1830, 1831, 1832, Under the Command of Captain Laplace*, Singapore, Antiques of the Orient, 1991, p. 68, プレート＃71を参照されたい。

(22) この作品に関して、大英図書館旧インド省コレクションのフランシス・ウッドと意見交換を行ったところ、「明らかにマカオではない」という点では一致した。しかし、それが筆者が主張するリオデジャネイロかどうかに関しては、比較検証できる資料がないため、言及できないとウッドは返答した。